

【Ⅲ】染色に関わる花と草

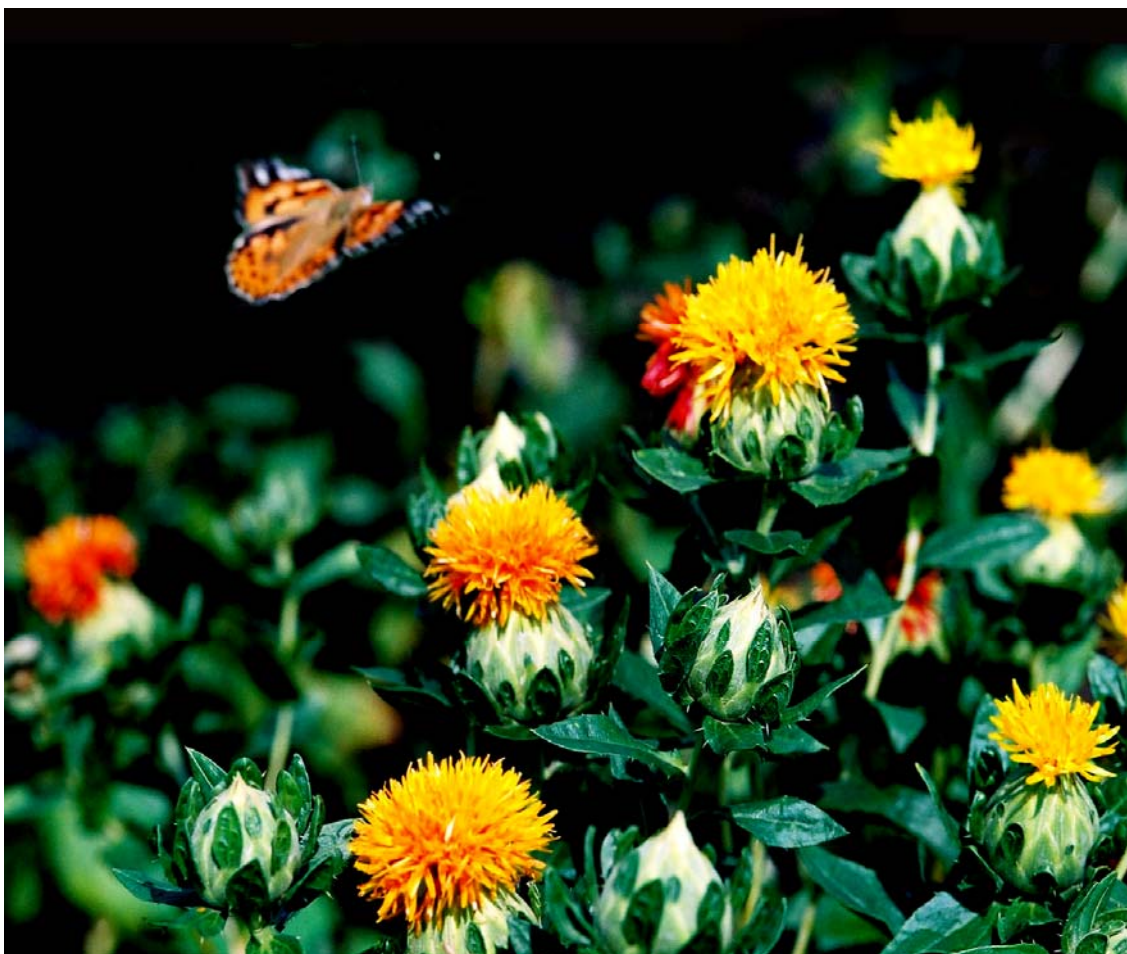
あらゆる哺乳動物の中で、人間ほどすばらしい視覚を持った生き物は他にはいない。確かに視野角では牛や馬に及ばないし、暗闇での視力は夜行性の動物にはかなわないものの、多くの色彩を識別したり、動体視力においては、他の動物を凌駕している。人間は嗅覚や聴覚が未発達な分、神様は我々には素晴らしい視覚を与えたのだろう。闘牛の牛は赤い布地をめがけて突進するといわれるが、牛は全色盲のために、赤も黒も区別がついていない。また蛇使いの笛の音に合わせて踊るコブラも、聴覚はほとんどなく、蛇は視覚に頼りながら、蛇使いが動かす笛との距離を、測っているだけなのである。人間はとかく自分と同じ視覚を、他の動物も持っていると考えがちだが、これは人間だけの特権であって、色彩の文化はこうした特権から生まれた世界なのである。前置きはさておき前章では糸や布、それに紙にする植物との関わりについて考察したが、ここではその布地や紙を染める植物について、考えて見ることにしよう。

さて染色に関わる植物の中にも、二つの系統がある。その一つは植物から取れた染料を直接布地に染めつけるもので、その代表は摺り染めである。もう一つは明礬(ミョウバン)などの媒染剤を用いて染色する植物群である。染色の技術は布地を作ることよりも、はるかに難しいもので、化学変化を理解していないと分かり難いものも多い。特に媒染剤を用いるものは、それなりの科学的裏付けがあるのだが、これはかなり専門的なもので、少なくとも、高校レベルの化学を完璧にマスターしないと分かり難いし、筆者にもうまく説明できる化学的知識はない。だからここでは植物と人間とのつきあい方に絞って、話を進めて行きたい。そしてもう一つ人間が染色技術を身に付けたことによって、社会に大きな変化が現れてきたことも忘れてはならない。官位の高低を色彩により決めたことは、その代表と見ることもできよう。そして冠位12階制などに見られる色のルールは、古代人の色に対するイメージそのものに他ならなかった。庶民の着るものの多くが褐色や無彩色であったのに対して、貴族は紫や紅色の華やかな衣服を身に付けていた。貴族の女性は十二単を身にまとい、襲(カサネ)の色目も季節などにより細かく定められていた。視覚において地位や身分を表わすことにより、一般人との差別化を図ろうとしたのだろう。

※媒染剤＝染色に際して染料が布地等にしっかりと染まるのを助ける金属化合物の総称。染料が繊維に染着し難いときに用いられる。あらかじめ適当な金属化合物の水溶液に浸してから染色すると、染料の分子と金属化合物が繊維の上で結合して水に溶けない色素に変わり、強固な染色を行うことができる。明礬はその代表例である。

【孔雀の視覚と五感】

- ※ オスの孔雀は美しい『飾り羽』を持つことで知られている。これは長い間、生殖に際して、メスをおびき寄せるためのものだと考えられてきた。またこの際メスはとりわけオスの飾り羽の『目』の数に注目し、その数の多いオスほど力強さを感じ、交尾するのだという研究もなされてきた。しかし最近の別の研究者によれば、メスはオスの鳴き声の数によってより強いオスと判断して、オスを選別しているのだという。なるほど魅力的な解説ではあるが、筆者は両説とも違っているように思う。確かに鳥は他の動物と比べると素晴らしい視力を持っており、瞬時にして水中の魚を確認し、急降下してこれを捕食したり、ツバメのように時速 200 km に近いスピードで電柱にもぶつからずに飛ぶことが出来る。これも素晴らしい視力を持っているからなのだろう。また人間は確かに視力によって性的な刺激を受けやすいが、果たして孔雀も同様なのだろうか。
- ※ 孔雀の交尾を見ていると、オスが大きく羽を広げているときに、メスがオスの羽を凝視する姿は見たことがないし、オスもメスに対して羽を誇示するような仕草を行わない。むしろオスは羽の裏側をことさらメスに見せるように振舞っていることが多い。これはつまりオスもメスも羽の表側に対する執着がないということの意味している。
- ※ ではなぜオスが羽を大きく広げるかを考えてみよう。これはオスは興奮して羽を大きく広げて自らの大きさを誇示するように行動しているようにも見える。この行動は外敵に対しても、またオス同志の争いでも共通しており、ちょうど猫が興奮すると、尻尾の毛を逆立てて、自らを強く見せるのと似ている。しかし孔雀の場合は、メスに対して開く羽と、外敵に対して広げる羽とでは種類が違うらしい。つまり2種類の羽があって、外敵に対して広げる羽は、メスに対して広げる大きな羽の支えの役割を果たしているのだという。ではなぜメスに対してこの大きな『目』のついた羽を広げるのだろうか？ 筆者はオスがフェロモンを分泌するためではないかと考えている。併せて自分を大きく美しく見せることによってメスの気を誘う。もう少しがった見方をすれば、この羽を広げることにより風によってフェロモンが四散することを防ぎ、場合によってはこの羽をウチワのように動かすことによって、より多くのフェロモンをメスに浴びせることが出来るようになっているのではあるまいか。
- ※ 人間の目は哺乳動物の中では屈指の部類に属する。このために他の動物も人間と同様の視覚を持っているように考えがちである。しかし視覚に優れた動物もいれば、聴覚に優れた動物もいるし、嗅覚のすぐれた動物もいる。生物の研究者は、常にその動物が持つ五感を、人間とは別なものとして考えなければならぬのだろう。そして動物における五感はその動物が生存し、繁殖してゆく上で、最も重要な役割を果たしていることを忘れてはならないのだろう。



上はベニバナに来たヒメアカタテハ。下は明礬を採るための湯の花採取地(栃木県那須塩原市)。

この項に記されている植物のリスト

【Ⅲ】 染めに関わる花と草	06-03-00-1
1) ムラサキ=紫	06-03-01-1
2) アイ=藍	06-03-02-1
3) ケイトウ=鶏頭	06-03-03-1
4) アカネ=茜	06-03-04-1
5) ベニバナ=紅花	06-03-05-1
6) ウコン=鬱金	06-03-06-1
7) キハダ=黄蘗/黄肌/木膚	06-03-07-1
8) クサギ=臭木	06-03-08-1
9) ホウセンカ=鳳仙花	06-03-09-1
10) ツユクサ=露草	06-03-10-1
11) アカザ=藜	06-03-11-1

目次に戻る
